

## ウクライナ問題 ～主に歴史的視点より～

黒川祐次氏 （元ウクライナ大使）

ウクライナ、ロシア、ベラルーシは、中世に栄えたキーウ・ルーシ大公国を共通の先祖としている。都はキーウであり、今のウクライナの地が中心であった。当時モスクワは北東の辺境にある地図にも載らないような寒村だった。

13世紀にモンゴルの襲来があり、キーウは陥落し、ウクライナの地には国がなくなった。他方、モスクワ公国が次第に台頭し、自分こそがルーシの正統の後継者だと自称し、遂には国名も「ロシア」（ルーシのギリシャ語形）と改めた。いわばモスクワがルーシを乗っ取る形となって現在に至っている。

ウクライナの地ではコサックにより一時ほぼ独立状態にあったが、少しずつロシアに蚕食されていき、遂には大部分の地がロシアの支配下に入った。その状態が2世紀以上も続いたため、ロシア人は、ウクライナは元から自分のものだと思うようになった。

事態が変わったのは1991年のソ連の解体で、ウクライナはロシアから離れて独立国となった。この解体によりロシアは超大国から並みの大国に転落した。

この状態を巻き戻そうとしているのがプーチンだ。彼は、ロシアをかつてのロシア帝国やソ連のような超大国に復活させたい、それが自分の歴史的使命と思い込むようになった。そのためにはロシアに民族・言語・文化面で近く、国力の大きいウクライナを取り戻すことが必須であり、まず第一歩であると考えているようだ。これが今回の侵攻の主たる動機であるが、副次的には、ロシアはルーシの正統な後継者と言いながら、ルーシの歴史と信仰の中心だったキーウがないのは大国ロシアとしての沽券に係わるので、是非キーウを取り戻したいという思いもある。

これに対してウクライナ側は以下の反論をする。

まず、ウクライナとロシアはお互いにその独立・国境不可侵を何度も条約で認めあっている。これに対する重大な違反だ。次に、ウクライナとロシアは確かに民族・言語・文化面で近いが既に別民族であり、その証拠にロシアは専制的、集団主義的だが、ウクライナは個人の自由を尊び、専制を嫌い、民主主義を実践している。歴史的にもロシアはウクライナを抑圧してきた。このような国ともはや一緒にはなりたくない。更に、ロシアはウク

ライナのモデルにならない。ロシア式のやり方ではウクライナに未来はない。我々は西側のやり方でやっていきたい。そして最後に、ロシアは自分がルーシの正統な後継者だというが、ロシアはルーシの伝統を引き継いでいない。またルーシの政治・信仰の中心であったキーウはウクライナにある、というものである。

今次戦争の和平の可能性については、ウクライナは、大きなことは戦争でしか決まらない。領土問題を残して和平をしたら、ロシアは戦後の交渉に乗ってこないだろう。目下、米欧の支援、国際社会の同情もあるので、このピンチをチャンスと捉え、何世紀にもわたって続けられてきた対露独立戦争の最後の仕上げをしたいと考えているのではないか。

この戦争でわかったことについて二点指摘する。

一つはロシアという国の真相があらためて浮き彫りにされたことだ。ロシアは19世紀の世界観・戦争観を持ち続けている時代遅れの国。世界を納得させ、リードする価値観を持たない国。資源と武器以外は国際競争力がなく、精神面でも物質面でも魅力を持たない国。強力と思われていた軍隊も意外と脆弱で、核で脅すしか有効な方法を持たない国で、これでは「巨大な北朝鮮」のようだ。そして本当は好かれないと持っている欧米を敵に回し、内心警戒している中国に一層依存せざるを得ない状況に自らを追いやった。これではロシアの衰退は必至であろう。

二つ目は日本にとっての意味合いである。

今回、多くの人たちが日米安保の重要性を再認識した。同時に、自らが戦ってこそ外国の同情・支援を得られるということが判明したが、この点はこれまで日本ではほとんど検討してこなかった点だ。

また、日本はウクライナという大親日国を得つつあることだ。日本政府がODAを一生懸命やったということもあるし、ウクライナはクリミアを取られ、日本は北方領土でやられたというように同じくロシアに痛めつけられているとの共感もある。それが今回の戦争で、ヨーロッパでもない日本がこれだけ支援してくれていることをウクライナ人は深く感謝している。

(了)